

の継続する傾向がある。

以上のことから、各分布型の大雪は、それぞれ異なる総観気象状況下で発生することが推測される。この問題は part 2 で扱う。

日本海沿岸地域の大雪の時・空間的変動

Part 2 典型的な降雪分布時の総観気象状況

秋山孝子(気象研究所)

Part 1 で、新潟県の冬期日降水量(資料, 30ヵ月)をEOFによって解析し、降水空間分布を3分布型(山地型, 平均型, 平野型)に分類した。Part 2 では、その3分布型の豪雪期間(3日間)の総観場の変動状況を、輪島の高層資料、および合成天気図を用いて解析した。

豪雪時、各分布型に共通して、上層 trough が非常に寒冷なこと、気団変質層の深い(SFC~700 mb)ことが、大きな特徴として指摘される。

山地型の豪雪は、wedge 型の深い trough が日本列島上を急速に通過し、それに伴って急速に発達した地上低気圧の後面の強い季節風下に発生する。下層(SFC~800 mb, 境界層と対流混合層)の WNW~NW 風は山岳に対してほぼ直角をなしており、厚い対流層の形成とその地形上昇によって、山岳地帯(標高, ~1,000m)の豪雪はもたらされると推測される。

平野型の豪雪は、上層の cold vortex が日本海上で南下(または深まった)後、ゆっくりと東方へ向かう時、

その寒気内で発生する。地上の depression は大きく発達しないし、急速に東方へ移動もしない。大陸上の高気圧の張出しも弱く、したがって、下層の季節風も弱い。上層の寒気は、山地型(~-35°C)に比して、より冷く(~-37°C)、気団変質層(対流混合層)はより上層まで及んでいる。平野型豪雪時、下層風の風向(WNW~WSW)は山岳に対して直角でなく、風速も弱い。地形上昇は副次的と推測される。

上記のように、小領域(新潟県, ~100×150 km²)の降雪量・降雪分布は、大規模循環系に支配されていることが分かった。

関東地方の大気境界層に夜間に発生する低気圧性 じょう乱の解析

原田 朗(気象研究所)

天気がよく、地上の気圧傾度が弱い状態で、山風が支配的であろうと思われる気象条件のもとで、関東地方の大気境界層にしばしば小規模な低気圧性じょう乱が発生する。その水平規模は約 100 km で、1 km の高さまで伸びている。この風系は、海陸風の理論や観測例から推測されるものとはかなり異なっている。また、うず度は $3 \times 10^{-4} \text{ sec}^{-1}$ ほどの大きさになる。最下層の収れんとその上の層の発散は、その間に上昇流を生じ、鉛直断面内の循環は自由大気中にエクマン層の空気を汲み上げる2次循環とみなせるであろう。

創立 100 周年記念事業について

記念事業については昨年より準備委員会を設置して計画を進めており、その現況をお知らせします。

1) 記念式典

昭和57年度春季大会(5月26~28日)の前日、すなわち5月25日(火)午後2時より記念式典を日本教育会館大講堂で開催、理事長、来賓のあいさつ、祝辞、科学講演会(内容未定)その他を予定している。なお式典終了後同会館で懇親会を開催する予定。(例年の大会2日目の懇親会は取り止める)

2) 熱帯気象国際シンポジウム

WMO および AMS と共催の熱帯気象シンポジウムを秋(10月18~23日)に開催の予定。プログラムについては決り次第お知らせする。

3) 日本気象学会100年史編集

1957年に75年史が刊行されているので、その後の25年

史を中心に作成し、重複をさけるが、75年史を所有しない会員も多いことを考え重要事項は取り上げ、天気へ掲載する。

4) 「天気」

4月号を特別号としてレビュー、座談会、100年史、総目録を掲載する。

5) 「気象集誌」

100年記念特別号を計画、すでに論文の募集を行っている。また集誌の Subject Index を1982年から新設する。

6) 地方支部における記念講演会

気象庁がホストする Study Conference on Large-Scale Oceanographic Experiments in the WCRP に来日する外人のうち数名に地方支部での講演を依頼する。